



伊地知文庫
文庫20
351
3



文庫 20
351
3



是より別して務負を以
て其の心は英雄乃臣を以
て馳走せらるる所 神妙也
叩境の祭あり 第一
成るる一とて白綿つきの
放ちる 東にお坂山南の
立田西の穴生山の有乳
乃鎮護を以て先一ツ
の教書を認るる 蘇
治雞坊乃何某筆を
取て田饒の詞をかり 蘇
奈の謀を顯して神明



卅七合

桃花雨をば竹の葉乃みよれ足其角

二字トス

五六間述てい返り尾波の心

し字トス

清明の節大雨志きりて思ひ
敗軍次稻麻竹葦に入乱
ゆれ多の志より尾波よりかたり
何もの志よりなん落書

雞去昼竹葉とりふ句を書
捨より是い丘山汎の僧雪乃
礫白干犬走生梅花とらる

對ちをるを時あつて用ひる
とつと桃花雨ふるはり羽翼
ハ醜くともくもる也晴て後
男浪乃とつて返りためらも
こゝし尾をんをれを尾花浪
乃勢立とそゆひさされ侍る
卅八合

白綿付乃黒て仕て取れ巳日や

乙字

桃筍つと正ほとけり 枚の埒百之
異出乃男白綾のやんごり丸

片けて甲んと出るとおろ願角
カミチあつて酒陶氏とらんゆり
立髪杖乃葉にささみちり胴骨
つんぐりとして叩斗樽のそく丸く
つらつら梅花の酔はれんとせ乃
目の精を後力量いゝららん
卅九合

く、つら胴返をいゝ鳥 甲一
捕距由とらん

第周子色並をなと次擲もか素琴
中入一と手はけりちるお女房乃
し字とらん

後んとは心得ぬ世 西富士の煙
乃かひやちあらん力かひあく歯之み
きらるるはし北雜晨次手しと
つらほいみこととて伝へ伝へ象も
らく片ちうき鹿必たうといへる詞を
あつてはし擲も心をうけてはれ
しおろり力乃出る寂中をらん
四十合

茶筌尾中鏝をたらくいさみぬ 習象
左右し字
あつてはし當之し 甲も 距 於 其角

茶筌妓にゆるる尾片しるや
二十一番乃老る毛も手弱き
方也何てかへし乃雜言平への
崩口をるるをしとを指とん
四十一合

鼻の字を味方へ引や番 椒 雪花
此とん

油の殿空餅ハとる庭莖
二字
嚴冬乃水舌写し三伏の番椒
に鼻の汗次辛烈乃氣忽ち
頂平へ色ておん海ふ血あるる

男寒相撲急しる中あし
味又(知)りても今しあま
空餅してきたる次手もあり
それいふ乃心けりさむいより
何けし本意とをね也
ハッ立七ッ起ハ関乃東の兵
卯十二合

兵と野もしをねト、呼ひ何壯
二字、似
足田鶴乃鞆丸乃負て務
桃李不言乃詩兵と褒美の上

うらみ州本ををひけしる一言誠ま
かゝりけし家トことひ出されて
棧鋪より此花をこゝへるなり
足田の傍の地味ハ伊勢の国
是乃裏の所よりきいあくるはるは 慈鎮
波ふよせても洗ひけりなり
成乃高きに松詞を置れり
海さうくちの法トともいへると
鞆丸のともいひつけ侍とく和
きさるやうらら丸の海をさるも
緒をさるしとの評義かゝらふ
湯家乃見え世四月あかへらる

る

卯十三合

いそのきこ木乃芽をわく 距亦右此

胡葱はごうはあふも取り 籠古岡

二字と次
是彼引用申るもあらねど

雞乃坊主のしる若也 岡指

先蹤正 ちれい双ふをを

垣を魚して 岡を合すはこふ

わらわとその人、若らまぬ成る

右の時節お應乃むすは州也

負手の味をわきまらとりしも
いしき巧言せ方この麩殿只
はるをそいけ酢乃過きると
言ふれぬるし

破味増

并四合

八乃字やさげの寄事と驚醒

左右しおとん

甯利を母れひうぬぬ咄判しん音子

酔といひささとりし好悪の

詞より心うつるはりあき也

未冠れりあるは距之末をさき

ひさのものの性得自然なり

めしひあふ入河津殿の侍も

一万箱玉母のこころと甘母房を

備えて母衣より羽袴をきせ

うたをいふ樊噲をもあはれ

老ののりし

卯十五合

血盲乃幾夜に掃きぬ密拵棗棹

也

尾雲も緋挑の海てきい百猿

二字あり

雞籠乃山明あんとあると見え
去つて聞くことしてうらみ音を
啼くつとみありし蜜柑の皮春の
細作の室をあきつて籠に入ると
見るとつとみて三月と知る口惜かり
血亡也若武者たたすも目
かけ信らもをわつ冠をきこひを
て紅桃乃あつてもぬいあを
冠重吳天雪血をかうと
楚地乃花ももをわつと
かといまて後いあらん
卅十六合

撫務を凡羽乃下、難波寺

二字あり

南京乃引音を猛下、水や空毎閑
し字あり
天王寺の撫務後記ありあふ
所大坂矮雞の事あり其手に
あひしりぐらう今もも凡羽あり
鳴屋たりし白くもも煤を
是源氏の嫡々南京の小太布
ゆ入りしをいそれ尋常なり
引音を大勢を合けらふ
中あれは水天色ありて子鳥

乃反ふふれり関路の多も
声くにはす申
卯十七合

足病乃かいは車や一皆疲花月
乙字

朱冠癰に潤つ三月待れり

烏医師の曰足やみ乃りし千
皆折失盡てとふ方か
是當分乃弱をさし千ありし
あのかるさし冠癰希有に
しと六ヶ補病也常鼻とを病

鷹氣鬱に寒苦烏飢者乃
多し良薬を得る此者
此病はるごと漢家乃
至癰強の膏薬に
多しとる多しとの也
去るく命運を全しと
かむ軍とをとりと
四十八合

皮を蹴て巴を負し悟気 喰笹分
乙字
雞籠二人静を合とたり
戴冠文と

此北負る乎（七誘）中
道もつゝ進（七誘）とわが路気
巻もは名乃の懐あつた巴原と
阿ふも此あつと益さううをこ
狭嫌らうと振興あつた粟津
乃あふ平放すれて後いつと
はとん其場もも大あつた
とつとあつた三芳野乃奥津
大葉島又放すは美雑あり
つん徒お知つとつとつとつ
影を作らまこととつとつと
谷なるや一勢たるもつとつと

丁と二人静
卯十九合

沼津より足高山（和）大樽（去）朝

山あつたやうなり乃雞乃可
二二字トス

清ん関取乃血脉原言あを
つとつと宿とあはつた利ノ者
共也みかともつとつと
名をそ君も同くつとつと
をそと知つて目出あつた
不と乃あつたつとつとつと

傳ら芳野唐土より名を
翅の薰物一紅粉化粧
花美ふふ人此心を
迷をを如平の後法度
多もも子を放ちやりぬ
幕爪の巻ふ

身のうしろをあげく
とらかき守てそ音も
うつをみ乃奇也此心
とそ

五十合

傍口推すも啄くも背て門

戴冠文トス

傳大士を雞驚ふとひと聯合依以

今ハ寺より雞を召忽推敲
三年の執り可て推ハ力啄
ハ品也韓退之是を相并
て以鳥鳴春と世上ハ鳴るを
らせしより輪藏乃三影
あきあきをた訓てを魚の
きいこ場也しとんつを
乃狂ひらうとて笑ハ

五十一合

拍手あつ色をまをかハ具負 辰下

左右屯と云

尾もる影隠し たり 放 雞 百之

社頭ノ雞カイヤキ寄合此

を去つたんとあ拍手ノ松柏の

霜の後をまをともも各浪入

角刀をねは笑ふものぬ

神山乃拍り平手うらとらき

幾来申も

五十二合

唯物血臭ひ嘴をけし 也 雪花

五字

頤畢凡赤き酒乃いとも 雪花

捕距武

片も州とも云言しかる業を

得て舞す意とひ瀧と云傘

り守るうらきももをぬぬ

目くら赤冠ともは乃とら次

出たり頤ぬらう今ふあはは

此鬼酒を力とら共かたハ佛力

とらハ神力をとりとらとも

あふふらとらとら

五十三合

凡至又深如泥之魚あらりし勝

左右乙字

筋背乃破軍をくわ花の軍志水

凡玉あけきり深舟泥んて精

ひ捨火珠をくわてんくわ筋背

は比角小星あり珍きやんて

手合乃くわやう左切ある屋

花と女榎花の陣をくわ

とくわ

五十四合

引色も日比の煤乃時鶴乞

五字

相運羅乃勢を隠や花曇り習奥

ひし七巻を新の夜乃月

月色とかよふ松詞正廣り

日頃の裡をとりひき引合をこ

向上ありはくわと雞人曉を唱ふ

新声明王の眸を驚馬をくわ

あしおお運屋乃花軍

一も千をくわ合をくわは心も

くわもくわ

五十五合

雞頭乃追手の梁の紅糸の分
也

土餅うら豆腐ありし君よ歌鳥子

二對乃名目ハ立あつたねまて
はあちつたぬ所あり是か

雞頭乃同くさしの紅糸負

とあつた其品こそれはなまて
紅葉鳥鹿のあちつたるこそは
新糸の因者場を食ひてを
乃のさつたるふさるんふ力業

角力乃外他もはあちつた土
餅とりあつた豆腐の初めあつた
葛蕪の白きもあちつた
五十六合

時下ニ後悔もあり蹴合の時百様

こ字右二文字

堀也乃眼を孺の鉄輪お

あつたあつた揮のふにのなまり
て睡まると物目をさすはあち
つ度也一り食つきて
時下りしつたるをおあちつたり

空後の備負後後すなり
三足のわし輪を世の中のみり
奇のにもありてあつてもなり
力をうゝみぬ中古野出の三節
と云々の片腕を切らば骨を
皮引かるとしてんるなり
鋸を以て肝の福より引切て捨
つる素門もあつて片枝と号す
此意地はわかると
五十七合

欠似平亦乃根撰や若手合其角

砂水不志所一息をも古湘江

捕距武

是平亦乃根撰と撰即方のいし
了け負後たてしも道理古湘江
昔は正乃唐織をうらつて
邪慢を撰つて手をつき三番打
しつる此方足れみしつる
難也

五十八合

雌々毛虫と捌く羽癖は素
屯

吳
いさかひ乃別まや唱よ昼下り 雪花

潜確類書に雞ハ蜈蚣を以
酒と良醴ハ桑椹酒と云々
其毒醉真乃物癖をつく
強ハむら子に毒ハくさるを
くろ左ハ廻る所ハ茶白
あふもとかハくろん
ちハ樂をかも知らるとん
早天から乃ん物待知卧
くろハ角力揃ハぬいな
あふ別まよハ是

五十九合

風負乃つやう大なる一廻ハ其角

中右乙

勝軍あふ独ハぬねや雄乃役

甲の志ハ移毛をつらみよる腕
首隠ハつ海鬼也ハあいに
冬ゆきその森乃海を平おさ
野五伏山平即ハる白智の原也
に云てかつの爪をかこもるおを
窈窕の左忽ハ風おまハつ海
舞のろそをき去らるもらるを

飄鷺くくく風情

苦く

六十句

猶突乃時をも同をんをく独楽

戴冠文と次右五字トス

ちわ布王の小結を進むを身 鬢 白楸

韋馱天の名くあをくしと

引廻しともとの下界へ入り投子

をくは去るく胸を突て絶

入るく渦おひ廻る大独樂乃

うしくは乃泡とまをくくくく

花の惣一

ちハ片のもの辯難合をうぬ

て去るて肝をそやうくうらむ

六十一台

鬢の麻から出て鳥の家

五字

噫にも地をとりあふ鳥伯樂が毎雨

七乃命道はくをりあふく

真里つを毛臍関内むを乃

帛意をわふあり作しを

くかけ乃毛をわく世界

国士中一才又 多ふか
欠伸噓噓心をつきて終相
をわらふ受伯樂乃煉磨也
さぬし乃手入今日のんを襟
裾をわたり立しる不當坐は夫
夫あまもも廿化あらまわく
鵬乃餅し
六十二句

投打乃履を相手やせつ六所
乙亥とに

今日の関筆を狂ふか六崎花月
五字とに

伊勢町小田原甲雞犬とも乃
中河川木戸を限つて取捨
童僕的心も亦志ありさぬ
獨遊をいさすは惣くあふ
王者ともや年比日頃乃意趣を
含て呉越乃名主を煩らは
欠り是くは系花長安乃
江戸気きて飽占にくる肥る
ゆく也

或人乃いつる信濃のる大分也
其卯も九年母なとありといふ
大分越後乃関符を荷ひて

川中島乃平合をんともや
龍而乃成漢楚の争ひ是
を末世の咄とよるる
六十三合

聒タ白をさうひふ矢壺くく虫辰下
乙字

抱分て血乃洗足を離れ酒百之

たふふ箭合也をのりく
羽に扎飛つるを放をさうく
阿らちるのるもあいに
手拂りしつあまうり喰ふ

乱をされい抱分くもり
去らふ血のそをんを酒
ひらりに成しはつるを
歪者あうり心を
油ひ大歌
六十四合

埒チをり乃いさあや桃乃花振ひ立朝
乙字

碁盤もしるを函谷へ彌三五郎

埒チをり乃いさあや桃乃花振ひ立朝
他の悪黨をを以て宵くその宵

一、八声の觸頭あるなり一、右の
孟嘗君の千の鳥ありしをわきり
一に廿千ありしをわきりしす
千をつらひらる雞術一三千の
容を越えたりしを戲流
人形乃名をわきり飛彈乃
掾と受領をわきりしなり
昔のをうらむる聲をわきり今乃
くみひの形を工にわきり扱僕
乃る過例一をわきりしをわきり
末記つものをわきりしをわきり
鶴ひしはは鶏をわきりしをわきり

羽多は羽形なるなり

難波は名二羽とも番一

六十五合

尾狂平の羽とありしは逆毛なり

左右乙字

蹴廻しや浅黄あわむ日士軍 雪花

尾狂ろもくさす申

雞乃御子あはらむ逆毛なり

此句とてそのも件とす未練
あも中とて尾狂ひ乃御あま
あつそしそをわきりしをわきり

くさくさは首尾十分なるを
五十五年以前乃若氣うて
しきさう取かつし
丁屋もあつてあつてあつて
口もあつても牛後とあつて
あつてあつて詞つてあつて
鳥主もあつてあつてあつて
表裏あつて仕立榮へあつて
濃きうへあつてあつてあつて
六十六合

撮距小荷歌奉行小隠まじり習奥
乙字

くさくさをあつてあつてあつて

軍旅乃子聞つてあつてあつて
書片のあつてあつてあつて
からあつてあつてあつて
つてあつてあつてあつて
舞歌

くさくさをあつてあつて

坂落平部曹司あつてあつて
得てあつてあつてあつて
かつてあつてあつてあつて
経てあつてあつてあつて

三十騎をわらとま先かけて落繩
拂ふをさるる落繩はしるも理りこ
夜軍いかわをそとを分目
の同軍ともあてし

秘傳なりありつとる

六十七合

カ屏の旗をひらうらうらと徳らみ百之
二字あり

かまの番てをさく由後か

後関引音を合を味方乃朱冠
をさるるてをさるるいけうさる

恨みの舞羽をひらふてを起る
あまの濁をぬきも徳の二意
カ屏の白旗をひらけ
おららにさくく蹴らら
関乃ぬ神一乃郷前
謹上再拜一奉まね
六十八合

陸奥殿乃鎧をさるるていさ合

五字

抱窮心ありや 叔土儀 廿月

白兄乃先陣後陣を

阿ふそひあふとちりあひのふり負
まふとて河平あふとちり色
と社あふあふとて日士軍
あふとてり一亦老と心うら
て御陣屋ももとてひ相撲
ももりあふ踊ちにてあふと
あふととてあふは一条目の剣札
をあふとて叔俵よりあふ入る
うらとてあふとてあふとて
とも多あふとて評あふとて
六十九合

百士乃知毛よまらるる時辰を

戴冠文

火啄やばあふとてに臆痕毛 毎兩

ニ文字

落足平負者はく喝と駒の
蹄よついでちりうとあふり
さぬ鮑乃尾をあふ火乃足
のうらとてあふとて慈悲心仏
法徳のあふとてあふとて三井
あふとてあふとて月夜鳥
啼てあふとて満所とて
篝火消るあふとてあふとて

乃の身しおる焼焚の雉山幸は
おのゝちをくくはあつて一啼乱
て寒食乃家を乞つてり
身乃上いふもさきをたれり
異国五火のすむるも何の
今此生鳥ともいふ尿を山吹
とちて根を根肉を大根よ
お一つ銀杏の刻おきしむも
前世乃其業因こそつては
人乃その身をせめて涙のぬ
をくくくくくくくくくくも
去くくくくく

七十合

一番乃勝を佐久間く吹流く其角

五字

お貝のかく次雑り十二揃

諫鼓苔深く治雞坊
塵靜也とりあつて氏
法神の力あはれは一番
乃奈をつては奉る是は
例年下らるるあつて萬
戸関をたれり
お貝十二隠 貝十二

務員を決り受十文か
勢あり此更委細
然の夜乃千夜を
ともを果あつて
わんとして司を
ゆえに箱弓の袋
引をとりて鳥の
と正木のかり
とらるる鳥の
鼓をくらおと
奉新

鳥沙汰曰

美母三年五月二日東山乃
仙洞より雞台乃
公卿待從僧徒
常々祇候乃老
己かこれ銀
鳥沙汰曰
を居る藤乃
之橋樹薔薇牡丹
作の花を
叅集
の山乃青山乃

箏策を吹和琴を去るを
嗟歎乃舞樂を和りて
板両方乃雞を合ふ

一番

左 右衛門督乃鳥字無名氏

右 五條大納言の鳥字千代丸

以上十二番 左務 卅番 右勝 六番
と記す哥女舞妓與遊下
絶す此の盃を勸む礼を
放宴と云といつても万休乃

養談を傳ふ黄昏了
あつてか乃く是を此事
中郷門乃左大臣殿乃傳
朝臣書 奉りたる也其代
乃記を合ひ合を傳るなり
是なる也
ちんちんちんちん

花名の後伝を

唐子合する也

左右總計

麗人
五字
三字
二字
雁形
屯

二句
十叩句
十八句
卅六句
卅二羽
十六距

寶晉齋其角



